

# 言葉でしか表せない心



アメリカ シカゴ双葉会日本語学校補習校 高等部 2年 岡田 東子

第5回日本語大賞 高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

言葉でしか表せない心

アメリカ シカゴ双葉会日本語学校補習校 高等部二年 岡田 東子

「自分の気持ちを素直に言える子はモテる」ということを聞いたことがある。確かにそうだ、自分の感情を言葉で表せないで、鈍い男性にむやみに推測させるのは無理がある。笑顔にもいろいろ種類がある。楽しいから、嬉しいから、無理しているから、心配させたくないから、甘えたいから、ニコやかでいたいから、感謝しているから。嬉しいから笑っていても、無理しているのかなと思わせてしまっていることもある。だから言葉で伝えるべきなのだ。感謝も不満もなにもかも。

私はアメリカに来て、言葉の大切さを知った。言葉が通じない最初の二年はまさに地獄。何を言われているのか、自分が何を言っているのか分からない。最初のうちは親切で話しかけてくれる友達もいたが、「日本人だ、珍しい。」という新鮮さがなくなると寄って来なくなった。気に食わないことがあっても、最初の二年の私は拗ねたように睨むだけ。言葉にしなければ分からないことがある。当然だ。気持ちにはこんなにも複雑で言葉で表すのも難しい。異文化から来た、睨むばかりの日本人の子の気持ちなんて分かりたくても分からない。だから愛想を尽かさず笑顔で見守ってくれた先生はなんて寛大な人だろう、と振り返って気付かされる。

当たり前だが会話は言葉を使って成り立つ。必要な情報収集も、簡単な自己紹介もままならない。そんな時期、私は初めてアメリカ人とけんかをした。

私は「英語はできなくても友達はできるはず。」と自分を励まし、折り紙で友達のを広げようと試みた。繰り返されるオーダー。「ねえ、今度はツルをお願い。」「私にはハートちょうだい。」「僕には箱を作ってよ。」最初は先生も私がお他の子と仲良くしているのをニコニコ見守ってくれたが、生徒の机が折り紙でどんどん占領されているのに気付いて、ちよつと困った顔を始めた。そんな頃。「ねえ、箱ちょうだい。」「ツルちょうだい。」「ハートちょうだい。」「前の箱こわれちゃったの、新しいのお願い。」「ねえ、ツル以外の鳥はなんかないの。」「ねえ、あなたの部屋にあった大きな飾り、私の部屋にも飾りたい。」一人の女の子からのリクエストが絶え間なく続くようになった。その子は私にとって一番近い存在で、初めて私の家に来たアメリカ人の「友達」で、初めて私の誕生日を覚えてくれた子。だから始めのうちは断ることができなかった。だけれど、繰り返されるリクエストにプレッシャーを感じて、投げ出してしまった。最低なやり方で。

私は、「もう嫌。」と簡潔にその子に言い、もう何もお願いされないように口もきかず、目も合わさず、避け続けた。日本語だったら言葉にして言えたのに。「ごめん、そんなに作れないよ。ありがとうぐらい言ってよ。なんですぐ捨てるの。大事にしてくれないんだったら何時間もおかかるとか作りたいくない。」友達は突然の私の反抗にびっくりし、傷ついた顔をした。なぜかと言わず、仲良くして

いた子からの突然の拒絶。当然の反応だ。他に友達もいないのに、折り紙が唯一のつながりだったのに、私からその関係を切り捨ててしまった。お互い他の友達もいない、明らかにけんかしたと分かる二人はお互い黙ったまま、目も合わさず、という日々が続いた。

休み明け。クラスの子はみな嬉しそうに学校に戻って来た。久しぶりに会う友達と抱き合ったり、楽しそうにおしゃべりしたりしていた。私も旅行の出来事を誰かに話したかった。そんな時、私はあの子と目が合った。お互い恥ずかしそうに、でも目が合ったことを嬉しそうに、はにかんだ。

私はその日、最後に彼女がリクエストした大きな飾りを夜更かしして作った。そして手紙を書いた。つたない英語で、辞書をひいて、頑張って書いた手紙はたったの三行だった。けれど次の日に渡したら、「ありがとう。」って満面の笑みで受け取ってくれた。一瞬で手紙を読み終わった彼女は、「あの時はごめんね。偉そうにいろいろ作ってっってお願ひしてごめんね。大変だったよね。一枚の紙からいろんなもの作れちゃうんだもん、トウコはすごいね。感動しているいろいろ欲しくなっちゃったの。あとありがとう、これ。すぐキレイ、大事にするね。」

言葉で仲直りできた私たちはミドルスクールに進学しても、高校生になっても友達のままだ。たまに廊下ですれ違ふと、気まぐれにオーダーされる。「あつ、今度パンダ作ってよ。」「期末テスト終わったらね。」なんて。